二　之と等しくコントの教も之を宗教と謂ふを得べし。成程『製造したる』宗教たるは明了なれども、其の宗教と稱せらるゝは、禮拜の本躰を有すればなり。所謂る禮拜の本躰とは人類と空間と大地との三にして、固とより神たるの名譽には相當せざれども、之を神とし崇むるものなるは、事實なり。而して此の事實は、翻つて、如何ばかり人類が神を慕ふものなるかを證すと謂ふべし。

1　註――十四頁

無教條の宗教　本文に掲げし說は、普通のものなれば、細說の要なし。余は只、一二の例を補足し置かん。

ルナン曰く、『宗教的觀念を朦朧の中に存し置く而已ならず、之と同時に亦、(1)宗教は人類と共に永遠なるべく、(2)宗教的表號は滅亡すべきものと信ずるは、蓋し今日の眞の神學と謂つて可なり。表號以上に、之が精髓たる精神あるを示さんとするは、全く將來のための勞のみ。宗教には斯る不朽の基礎あり。然るを之に滿足せざる人は、宗教を何の基礎の上に據えんとするや。』

レヴィル曰く、『現存の宗教は滅ぶるも、宗教の實質は滅びず。たとひ滅びたりとも、亦他の形を取りて出來らん』云々。

レヴィルは、佛國自由新教派の名士なり。其の機關『免除』の中に其の綱領を說いていふ、『僧侶なき教會、問答なき宗教、教條なき道德、義務章程なき神』と。

J註――十六頁

審美的宗教論　宗教の理想、宗教の信仰は、只想像的、詩歌的、審美的の價値を有するのみとの說は、隨分その數多し。基督教神學者にありては、此傾向獨乙のデ、ヴェットに始まれり。又唯物學者中にありて最も有名なるは、『唯物論史』の著者ランゲ是れなり。次に唯心論者中にありては、先づ指を佛國のヴアシユローに屈せざるべからず。彼曰く、『神は世界の觀念にて、世界は神の現實なり』と。最後に無神論者を代表して此の說を唱ふる者は、フオイエルバッハにて、神の觀念を幻影なりと認む。

教授セッス、是等の諸說を一括して評すらく、『無識に發はれし信仰は、堅固にもあらねば、又開發の見込もなし。即ち是れ不可識者を信ずる無根的信仰にあらざれば、ランゲの唱ふる詩的想像に外ならず。ランゲは曰く、此の現象界は物質界のみ。されど、不可識者の超然性は、我等の知り得ざる所なりと。さて此の超然性の理想境に、解釋を下すは、是れ主として詩人の任なるが、此の理想境の有無、此の理想境と

事實界との關係如何を問ふは、無益のことなり。よし亦之に對して答を得たりとも、斯る空想的答辯は、哲學の任務も、宗教の任務も、共に果たし得るものにあらず。成程、哲學の綜合、宗教の信仰、共に現躰問題ならねば、詩歌に類せる所あるに相違なきも、事實の識見、事性の信仰を顯さゞる綜合及び信仰は、半錢の價値もなし』云々。

K註――二十三頁

宗教的知識と理論的知識　アドルヲル曰く、『近來理論的知識と、審美的若しくは宗教的知識の區別を探る人多し。抑も審美的、宗教的、知識は、眞理の知識には關係なく、只實用上のものなれば、我等の知識は之がため進歩するにあらず。たゞ主觀的目的を達するための手段に過ぎず』云々。

此說が前講に揭げし『審美說』と相類せること、想像の外にあり。即ちベンデルの如きは、兩說孰れを執るや、判じ難き程なり。されどカフタンに至りては、信仰と理論との調和に力め、『眞理は一のみ。而して、凡ての眞理皆神より來る』といひ、信仰の題目にも、理論的方面あるを認めたり。殊に注目すべきは、近時の一論文中、彼は、『價値判斷』なる語を全く棄却せることなり。即ちいふ、『余や、曩きに信仰の題目を專ら價値判斷となし來れるも、今や、信仰の知識を其の起源に從ひて記せんとするに方

り、此の價値判斷なる語を避けんとす。信仰の題目は、理論的判斷なり。されど其の根據は價値判斷なれば、價値判斷なくば、理論的判斷も亦その用なし』と。

尙ほ此の區別に關しては、ハルトマンは、『宗教哲學』第二卷一――二十七頁に、リブシウスは『教條學』十六――九十三頁に其の說あり。兩者とも、宗教的ヴェルタンシャウングと理論的ヴェルタンシャウングの區別及び關係を詳說せり。

第二講の註

A註――三十九頁

基督教に於けるキリストの中心的地位。キリストの基督教に於ける地位は、他教の開祖の其の宗教に於ける地位と異にして、全く無比特別なるは、多くの學者が、種々の見地より論證せるところなり。

ヘーゲル曰く、『我等キリストを見ること、猶ほソクラテスを見るが如くならば、是れ單に人とし見るものにて、回々教徒と異ならず。回々教徒は、キリストを神の使者と認むるものなればなり。……又我等キリストを人類の教師、眞理の殉證者といはば、是れ基督教の見地を代表するものにもあらねば、眞宗教のそれを代表するものにもあらず』と。

シエルリング曰く、『基督教の眼目は、キリスト自身にて、キリストの言にあらず。キリストの人物、キリストの行爲なり』云々。

デヴエット曰く、『キリストの人格、キリストの生死、キリストを信ずること、是れ基督教の中心なり。宗教の精神キリストにありて、人格化し、而して其のキリストより逃り出づるや、太早の雲霓を待つが如くなりし世界に新生命を與へて、之を感化せり』云々。

リプシウス曰く、『基督教會がキリストの人格、キリストの事業を說くを見れば、キリストの人物を其の歷史的基礎と自認せるを知るべし。されば、こは只、凡ての宗教皆その開祖ありといふが如き意義にて、然るにあらず。キリストの人格は、基督教の思想を代表し、天下後世の儀表たりとの意義にて然るなり』云々。

リッヽル曰く、『キリストの人格は、基督教ヴエルタンシャウングの關鍵にて、基督信徒克己建德の標準なり』。

B註――四十二頁

アリアン說の失敗　『教會季刊評論』の一記者曰く、『基督教の教義は、帝政に反對して起れるものゝ如く稱せらるゝも、其實は然らず。ニケヤ會議の決議は當時神學思想の自由なりし結果にて、コンスタンチンは、一致をこそ望みたれ、決議の如何には、頗着せず、之を議會に一任したるなり。されどニケヤ會議の決議が、コンスタンチンの勢威に左右せられしは疑ふべきにあらず。是れ彼は多數者に左袒せしも

のなればなり。斯くてアリウスは、多數の爲に壓倒せられしも其意見は滅びず。反動はその蔓延を助けて、アリアン説は、五十年間存留し、一時皇帝の助を得て、非常の流行を極めしこともあり。されど、アリアン説は、眞理の基礎を有せず。基督敎に反對のものなれば、皇威の陵夷と共に、正統派その勢を得、アリアン説は全滅せり」云々。

近代に於ける英國アリアン説の歷史及び、其のユニテリアン説への變化は、ドルチルの『基督學史』第五卷附錄なるフエイアベルンの論文を見よ。

C註――四十四頁

近代ユニテリアン説　近代ユニテリアン説が、全然超自然的分子を拋てることは左の拔萃を見て之を知るを得べし。即ち博士マルチナウは其の著『近代神學の得失』の中に今日ユニテリアンの地位を叙し、主として二得ありたりとなして曰く、『宗敎、全然外部の權威を脫却し、又全然メシヤ的神學を棄てたり』と。又曰く、『從來福音記者及び神學等がイエスに附着せしめたりし職務的分子は、悉くイエスの人格より離れ去りぬ。彼等が、斯る僞服をイエスに着せしめ置く間は、イエスを殺すに等しかりしなり。之をダビデの裔なりといひ、預言に應せしものといひ、王と祭司

と審判者の權威ありといひ、天使を卒ひ、雲に乘じて再臨すべしといふは、キリストの眞相を損ふものと謂はざるべからず。イエスは單に人類にて、其の靈的生長と共に、神として開花したるに過ぎず。……此の歷史的事實に附加せしものに至りては、其の誕生の時の天使にても、其の誘惑の時の惡鬼にても、其の將來の威嚴にても、地獄、水晶海、極樂、煉獄等のものにても、全然融解し去りて、我等は只限なき空間と聲なき星辰とを見るのみ』と。

D註――四十五頁

キリストの人格に關するリツヽル派の讓步　リツヽル説に於ては、只價値判斷の點よりして、キリストに神性ありといふ而已。其背後に哲學的の意義ありとはなさゞるなり。されどリツヽルの弟子等が、少しく此の立場に變更を加ふるに至りたることは、是れ注意すべきことなり。余曾てリツヽル派神學に關し、『思想家』と題する雜誌に記して曰く、『我等キリストの垂れ給へる啓示に對し、到底無言の僅なること能はず。又啓示の所有者にして、且つ天國に特別に關係を有するキリストの如何なる人物なるかを疑はざること能はず。是れ蓋し近時の一傾向なり。我等は只キリストの我等に對する價値如何を調査せるだけにて滿足すべきものに

あらず。又宜しくキリストの人物如何と思ひ廻らさざる能はず。……從來キリストの神性を言顯せる語は、意味茫漠、或は單に是れ形容にあらずやとの疑さへありしほどにて、人心は、到底之に安んじ得べきにあらず。此に於てか、リッチル派の人々すら、其預期に反し、一歩を進めざるべからざるに至り、最初は、キリストの人格の哲理的基礎を拒絶せるにも拘らず、今や却て之を認むるの方向にあり』云々。

ヘルマン曰く、『余は確信す、キリストを信ずる以上は、自然の勢、キリストの前在を信せざるべからず。然り、キリストの理想的前在を信ずるにあらで、人格的前在を信せざるべからず。所謂る理想的前在は、余を以て見れば取るに足らざるなり』云々。

ボルチマン曰く、『或意義よりいへば、福音とは取りも直さずキリストの神性を信ずることなり。基督教的生活の目的と內容全く此に竭く』云々。

カフタン曰く、『キリストと神との關係は、其の性質全く無比にして、再演せらるべきものにあらずとの事實は、我等をしてキリストの神性を信ぜざるを得ざらしむ』云々。

リッチル神學の此の傾向は、益々進歩して、その從來排斥したる舊神學との關係益々明了とならん。

E註——四十六頁

自然神教の弱點　レヴィル曰く、『自然神教は、健全の哲學にありては、維持し得べきものにあらず。是れ神と世界との二元論を立つるものなり』云々。

教授セスは曰く、『自然神教は、神を分離して、世界と人類との外に立たしめたるが、是れ即ち神以外に別に深き關係なき世界ありとするものにて、取りも直さず神を有限のものとするものなるは、其の預期せざる所なり』云々。

F註——四十七頁

近代自由新教の弱點　獨逸、荷蘭、瑞西、佛蘭西等の諸國に、歷史上の超自然的分子を否定しながら、尙ほ、基督教てふ名を冒し居るものあり。之を稱して近代自由新教といふ。其の假面を剝ぎて、偏理說なることを曝露するものは、ブッライデレル及びレヴィル等なりとす。抑も此の自由新教者は、在來の信條を批評し、否定するを憚からざると共に、又在來の儀式を保存し、時としては、彼等の觀念を粧ふに在來の教條を以てすることすら、無きにあらず。ストラウスや、バルトマン等の輩が、之に對して、嘲弄の辭を極むるも、決して無理ならず。

バルトマン曰く、『自由新教者は、父母の方にて、バプテスマと堅信禮とを受けしてふ

事實を除けば、全然基督教徒と稱するの資格なし。基督教はキリストを信ずといふことを其の旗幟とす。是れ古今共に然り。……然るに、自由神教者は、ルーテル、トマス、アクイナス、ヨハチバウロ、ペテロ等の跡れが信せし如くにも、キリストを信ずるにあらず。況んや、キリストが、自ら信じたる如くに、信ずることをや。蓋し、キリストは自らキリストを信じ、メシヤを信せしものなればなり』云々。

斯くて此の自由新教なるものは、啻に、基督教たり得ざるのみならず。又遂に、有神論たり得ざるに至るもの多し。即ち瑞西と佛國との自由新教主唱者たるエドモンド、シエレルは、基督教の要素たるほどのものを、悉く放棄せるのみならず、絶對の懷疑論者となり、荷蘭の自由新教主唱者ショルランまた、自己の觀念と、聖書の觀念とは全く符合せず、其の間に渉るべからざる欠陷ありとするに至り、その一派遂に土崩瓦解に了りぬ。

G註――四十九頁

基督教と進歩の觀念　教授カンドリッシュ曰く、『人類は、向上的のものにて、遂には聖善の域に達すべしてふ樂天觀は、古代に欠如したりし觀念なり。古代の哲學者及び詩人は、人類を以て、過去の黄金時代より漸次墮落し來れるものとなし、然らざれば、同一の事件同一の狀態を絶えず繰り返へしつゝあるものとなせり。人類は完全に達すべきものにて、今は進歩の途中にありとは、基督教以後の思想にて、是れ或は幾分か學術の進歩にも由るべけれど、全く天啓の約束、天啓の眞理の力に歸せざるを得ず。……近代、萬有界に於ける學術の發見、相續で起り、其結果、基督教を信せざる人までも、人類の進歩を自明の眞理と看做すほどに至りたれど、神を天地の造主と信じ、又之を恩寵の神、救の神と信ずることなからんか。斯る樂天的の世界觀は、之を根據なきものと謂はざるを得ず。近時厭世說の流行は、即ち之を示すと謂ふべし。而して人類の進歩を主張するに熱心なる人の中にも、天啓と基督教とを離れて、別に確かなる論據なきを自認し、遂には厭世論に墮落すべきかを恐るゝもの多し。

H註――五十頁

厭世論の流行　ルタルト曰く、『現時哲學の研究、哲學の好尚、大に壞敗せりとの嘆息喧しきにも拘らず、或る一種の哲學流行して、空前の盛況を呈しつゝあるは、之を奇と謂はざるべからず。而して此の種、哲學書の成功は、花々しき文學書や、小說などの成功と相伯仲す。是れ他なし、哲學とは、即ち厭世哲學にして、哲學書とは、エ、プオ

ン、ハルトマンの著作是れなり』と。

カール、ベーテルス曰く、『ショッペンハウエル主義は、近時我獨逸に於ける主要の傾向なるは、疑を容るべからず。若し之を疑ふ者あらば、去つてラバンの書籍目錄を一見せよ。ショッペンハウエルの意見と觀念とは、我邦の空氣中に充ち滿てり。……我種族が各方面に於て、長足の進歩をなしつゝあると同時に、民衆は、人生の苦痛を最も痛切に感じ、厭世的の潮流滔々として、現時の思想界に氾濫す』云々。

I註――五十四頁

厭世論より有神論への過渡――ハルトマンとカール、ベーテルス　厭世論も亦終に宗教の必要を感じ、而して、自ら此の必要に具ふる所あらんとするを見るは、之を奇と謂はざるべからず。ハルトマン以爲へらく、將來の宗教は、東洋の宗教的進化說と、西洋のそれとを併せたるもの、即ち凡神的進化說と、一神的進化說とを併せたるものならん。只その基礎とするところは、諸宗教必然の假定たる『基督教の厭世主義』ならんと。而して此の新宗教のことは、其の著『宗教哲學』の第二篇中に之を詳說したるが、其の目次を一見したるだけにても、基督教の術語悉く、之に使用せられ居るに驚かざるを得ず。先づ初めには、宗教の人的方面を說き、次で神的と人的の

兩側面に及び、之を分ちて(1)恩寵と信仰を總說す、(2)默示の恩寵と知的信仰、(3)贖罪の恩寵と情的信仰(4)成聖の恩寵と實際的信仰となせり。然るに、神は全知、慈愛、正義、聖善のものとなしながら、尙ほ之を非人格的、無意識的のものとなせり。果して然らば、ハルトマンも亦、其の自由新教を責めし辭に該當するものにあらざるか。

カール、ベーテルスは、フロイエンスタットとハルトマンとの說を評し、是れ知らず識らず有神論に移り行くものと謂ひしは蓋し當を得たり。即ちフロイエンスタットの哲學を評してはいふ、『世界は、もはや世界的大靈と同一視せらるゝにあらず。是れ知らず識らず、凡神論より有神論に移り行くものなり』と。又ハルトマンを評してはいふ、『ハルトマンの無意識者說は、是れ凡神論より有神論への過渡を代表す。……ショッペンハウエルの說は唯心論より實在論への過渡なるが如くに、ハルトマンの說は、凡神論より有神的ヴェルタンシャウングへの過渡なり。……ハルトマンの無意識者は、世界的過程に超然し、世界的發展を包有する全能全知者にてあるなり』云々。

J註――五十五頁

獨逸の唯物論　獨逸に於ては、フォイエルバハ、スチルチル、ルーゲ等の運動に由り、

極端の唯心的凡神論一變して、唯物的無神論となりしこと、是れ有名の事實なり。一千八百八十五年の『長老教會評論』(プレスビテリアンレヴュー)中、ロッツェの有神哲學を評せる中に、左の記事あり。

『唯心哲學に反抗して起れる實驗哲學は、遂に發達して、頑冥の唯物説となれり。一千八百五十四年九月十八日、ゲッチンゲンに於て、ルドルフ、ヴァグネルが「人類の創造と靈魂の實質」なる有名の演説をなせし以來、唯物説は獨逸に行はるゝこと、茲に二十年。カール、フォグトは、ヴァグネルの打棄てし鉄罩を拾ひ上げ、單純の信仰と學術との決鬪場裡に入り、撫夫の如き單純の信仰に滿足せるものゝ面前にありて、思想の腦髓に於けるは、膽計の肝臓に於けるが如く、尿の腎臓に於けるが如しとふ有名の句を吐けり。斯くて通俗的の書籍は、續々出版せられ、唯物説の傳道一時流行して、若し物質に優れりとせらるゝものあれば、之に對して迫害を加へたり。されば、宗教に對しての反對は、激烈にして、公然、無神論を説きて、少しも、愧ぢず。物質は永遠なり。物理的、化學的勢力の外には、終極的勢力なしとせられ、フォグテの如きは世界は、有機的物質なく、一定の創造者なく、主たる觀念もなくして、存在するものなりと謂ふに至れり。ヘルヴァルドも亦公示すらく、科學の勞は、凡ての理想を

破壞し、その無實空虛なるを顯し、神と宗教とを信ずるは、虛僞なるを示すにありと。フヒテルは之を、他に比して、一層傍若無人の人なるが、此事情を概記して曰く、「有神説即ち人格的の神を信ずることは、古今の歴史の示せる如く、僧政主義の基なり。凡神説即ち遍滿的の神を信ずる信仰は、五官を輕視し、自我を否定し、神に吸收せられて、停滯不動に達するの基なり。自由に達し、知識に達し、進歩に達し、人類の正當認定に達するもの、換言すれば、人類主義に達するもの、唯一の無神説、即ち哲學的一元論あるのみ」と。斯くて、唯物説は長足の進歩をなし、フヒテルの「勢力と物質」と題せる書は、獨逸唯物説の聖書とも稱せらるゝものなるが、一千八百五十八年の初刊以來、二十年を出でずして、十四版に達し、殆んど歐洲全土の國語に飜譯せられたり。されば、學術界は、殆んど全く唯物的となり、普通人民は、今日も尚ほ、此の感化を脱せざるもの、尠からず。大學の哲學講師また之に當るに堪へざりき。……されど獨逸の唯物説は、今日また舊の如くならず。信ずべき學者の説によるに、その生長の速かなりしが如く、亦急速に衰頽しつゝあり』云々。

第三講の註

A註――七十二頁

原始拜物教と幽魂禮拜　宗教は最初、拜物教にして、それより多神教となり、遂に一神教となるとの說は、アウギュスト、コントの唱道せる所にて、グロッドの如き、レインの如き亦之を贊成せりと雖、現今の學者中、亦之に左袒するものあるを見す。げに斯る進化を遂げし宗教は、歷史上一も其の實例なし。

フェイアベルン曰く、『外國の影響を受けしものは、兎も角、自ら無神論より拜物教に進み、拜物教より種々の階級を歷て、一神教に達せし人民とては一もなし。此の實例の出づるまでは、「宗教自然史」なるものの主張する假說は、假說たるに止まらん』と。

マックス、ミューレル曰く、『「亞弗利加若しくは他處の拜物教が、原始的宗教たることの證明せられざる限り、拜物教以外に、宗教なき時代ありしといふは、早計なり。亞弗利加の宗教は已に判明したりとにはあらざるも、如何なる蠻民も拜物以外に、別

に何等かの宗教的感情あるに似たり。……此故に、余は信ず、拜物教は、亞弗利加に於ても他處に於けると同樣、宗教の腐敗せるもの而已』云々。

スペンセルは、ハリソンの原始拜物教說を駁していふ、『百有餘の實例に就て推論するに、ハリソン氏が「無數の人民、無數の年代」間信奉したりといふ宗教の、何處にも存するを見す。……余は却て、ヂュアング人、アングマン人、フェゴ人、濠洲人、タスマニア人、ブッシュメン人等の劣等國民に拜物教なく、古代の白露人、近代の印度人の如き進步せる社會に、最も進步せる拜物教あるを示し置けり』云々。

プフライデレルも亦曰く、『是等の事實に由りて考ふるに、宗教は拜物教より進化せるものなりとの說は、余を以て見れば證據不充分なるのみならず、心的不可能のこととなり』と。

スペンセル氏は、此の原始拜物教說に代ふるに幽魂禮拜說を以てしたるが、此說に對しても、ハリソン、マックス、ミューレル、其他諸學者の反對あり。

ハリソン曰く、『余は常に此說を以て、氏の社會學說の中、最も不幸の一說と信ず』云々。

マックス、ミューレルまた此說を歷史的に審檢し、遂に誤謬の前提に基ける說として、之を排斥せり。其言にいふ、『萬一祖先禮拜を唯一の宗教とする國民あるにもせ

よ、こは果して自然神の禮拜が、悉く皆此の祖先禮拜より出でしを證するや如何』と。

レヌーフ曰く、『我等有史以前より有史以後に移りて之を見るに、埃及の土地には、古代の歐洲人等が懷抱したると頗る相類似せる諸種の思想あり。而も、スペンセルの所謂る宗教の原態は、祖先禮拜なりてふ說の確證を見る能はず』云々。

次に亦、拜畜教を以て、宗教の起源を解釋せんとする人あり。されど、是れには學者の贊成至つて尠し。レヌーフ曰く、『諸君の多くはマクレラン氏の「動物及び樹木崇拜」と題する一文を讀まれたるならん。同氏は、古代の國民皆曾て有史以前に拜畜教時代を經過せし事あるを示すとて、天の十二宮の記號を其證とせられたり。……斯くの如くならば、氏は時世に後るゝこと、五十年を下らずと謂ふべし』と。

マックス、ミユーレル、プフライデレル、レヴイル及び其他は、以上の凡ての說に反對すると共に、宗教の起源は、山嶽、河川、太陽、穹蒼の如き自然の大物崇拜にありとなす。されど前の諸說若し餘り低しとせば、此說は餘り高きに過ぐるものにあらざるか。是れ原始人類は、野蠻人なりしに、而も何の天啓をも受けしことなしとするものなればなり。拜物教論者は、斯る高尙の宗教出でし前、拜物教の時代ありしといふかも知るべからず。之に加ふるに、此說は、歷史上の證據に乏しきこと、他の諸說と相同じきを如何せん。

B註――八十四頁

舊約一神說　希伯來人一神說の起源に關しては、批評家の間に、互ひに相反對せる二說ありて行はる。

第一說は、ルナンの說にて、『一神說的の本能』は希伯人の遺傳となし、且曰く、『セミチック人種の意識は、明了なれども、幅員なく、一致を認むれども、複雜を解すること能はず。その一神說は能く之を代表するものにて、其の特質を顯せりと謂ふべし』と。此說の當否、論ずるを要せず。事實は全く之に反對すればなり。

第二說はキユーチンの說にて、イスラエル人も最初は其の近傍諸民同樣、多神教、偶像教を以て初まりしものなりしも、漸次倫理的一神說に到達せるものなりと。而して其論法を見るに、一應は、尤もに聞ゆれども、實は取るに足らず。之に對して最も精細の批評を下せるものは、ベートゲンなるが、その第一點に於ては、セミチック的多神教の特色を論じ、又第二點に於ては、イスラエル人の信仰は、キユーチン等の說の如く、其の同種族と等しかりしかと自問し、歷史的の研究に由るに、イスラエル

人の信仰は全く特絶の一神主義なりと自答せり。

摩西五書に對する近年の批評の結果に徴するも、イスラエル人の一神主義は、之を多神主義の發達とは見るべからず。即ち預言者の時代に於ては勿論のこと、列王時代以前に成りて古き口碑を含有するJ原本、及びE原本に於ても、一神主義は已に著し。例せば、アブラハムが神の召を受けたるが如き是なり。其他、エホバが世界を造れりといひ、人類は一族なりといひ、洪水は人類を全滅せりといひ、神ノアと契約せりといひ、一中心よりして人類再び蕃殖せりといひ、エホバを全地の神とする等の如きも、亦是れなり。

C註——九十頁

カントと宇宙形質論的證據法

カントは、此の證據法を稱して理的臆斷の「巢窟」なりと謂へり。されどカントが此の證據法に對して反對を表する所以のものは、之を其の知識說に由來すと謂はざるべからず。即ちカントの知識說によれば、心は、現象に支配せらるゝものにて、又原因結果の法則は、現象界以外に適用すべきものならず。果して然らば、彼が此證據法に反對するも、亦理ありと謂ふべし。次に彼が二律背反なるものに就ていふも、亦然り。二律背反とは、世界形質論的觀念を

理論上に應用するの際、人心に湧起する衝突の謂なれど、我等を以て見れば、此の衝突は、單の衝突にあらず。其の基礎全く殊別なる二種の思想のみ。然り、一方は、心之を受諾し、一方は心之を拒絕するものゝ謂のみ。一例を擧げていへば、世界は初めありといふと、なしと謂ふとの二思想の如き是なり。こは畢竟原因結果は、永遠より存するを認むると、現象以上に神の存在するを認むるとの相違なるが、此の二のものは之を同等のものとは見るを得ず。即ち世界無始論は、不可思的、矛盾的のものとして人心之を拒絕するに反し(第四講を見よ)、世界有始論は人心に理性的滿足を與ふればなり。更に他の例を擧ぐれば、自然法と自由意思との如きも亦二律背反なり。されど、こは自然界の法則は自然法にのみ限り、其他に別に合理的、容知的法則なしとする場合に於ける二律背反なり。又自由意思てふことの定義如何も、幾分か關係あり。

D註——九十二頁

カントと目的論的證據法

カント曰く『此の證據法は、眞に敬意を表すべき證據法なり。是れ最舊、最明のものなると共に、又人の普通理性に最も適せるものなればなり。是れ自然界の研究に起源し、絕えず是より營養を受くるものなると共に、頑

つて又大に之を策進す。加之、此の證據法は、亦手段と目的とをして、我等が單の觀察のみにては發見するを得ざる地に到達せしめ、自然界外に儼存せる致一てふ原則を以てして我等の自然的知識を啓發す。而して此の知識はまた、之が源たる觀念に其反應を及ぼし、宇宙の造主を信ずる信仰をして牢乎拔くべからざるものたらしむ。此故に此の證據法の名譽を毀損せんとするが如きは、曾に忘恩の擧たるのみならず、又徒事なり』云々。斯くてカントは更に其語を續け『我等は此の證據法の理屈と實効とに反對せず、却て之を推薦し、之を奬勵するものながら、而も此の證據法が的確の證據法なりと言ふに同意する能はず』といひ、進んで其の異見を列擧したるが、カントの意は、本文を見ても明かなるが如く、此の證據法の効力を否認せんとするにあらず、只その應用範圍を窄ふせんとするに止まる。

E註――九十四頁

進化論の諸派　進化論者なるもの、悉く皆同臭味のものにはあらず。又有機的進化は現實なるを認めんとするは當今の風潮なると共に、ダーウイン立論の基礎の強弱を疑ふとも、亦目下の流行なり。是れ我等が、最初に心得置くべき點なりとす。

一　進化論者の中には、最初よりしてオーウエン、マイヴオルト、アサグレイ、ジ、エチ、

ルーイス、デナ、ゼー、ゼー、モルフィー等に由りて、代表せらるゝ一派あり。彼等も亦互ひに相合はざる點あれど、等しくダーウインの自然陶汰說は、種の起源を說明するに足らずといひ、而して何れも皆、進化の原因を有機躰外に求めずして、有機躰內に求むる傾向ありき。且つ彼等の多數は、有神的進化論者にて、睿知と目的とを假定せでは、有機躰の進化は、說明すべからずとなせり。

二　ダーウインの同勞者ともいふべきエーウオレース氏の說は、二の重要なる點に於て、ダーウイン說に異なり。(一)ダーウインは、其の自然陶汰說を以て、不充分の說明と自認し、他日之を補ふに、雌雄陶汰說なるものを以てせしが、ウオレース氏は、雌雄陶汰說を排し、ダーウインの原說を維持したり。(二)ダーウインは、其の說を以て、人類も下等動物も、悉く之を說明し得べしとなせしが、ウオレース氏は然らず。進化の連鎖には、幾度か破綻ありつるならんといひ、特に人類は、特殊の起源を有すとなせり。

三　特に近時に至りて、ダーウイン說に反抗の兆著しく、自然陶汰のみにて說明するを得ざる幾多の現象あるを認むるに至れるは、注意すべきことなり。乞ふ、一二の例を示さん。

ジー、ゼー、ローマニース氏は、一千八百八十二年、『進化論の科學的說明』に就て、一書を著はし、大にダーウイン說を辯護したるが、一千八百八十七年には、雜誌『十九世紀』に書を寄せて、『自然淘汰說は、種の起源說としては、不充分なるを證明すとて、生理的淘汰說は出でたり』といへり。生理的淘汰說はローマニースの自說なり。

ハーバルト、スペンセルは、『有機的進化の成分』に關し、二の論文を草したるが、自然淘汰を重視すること舊に異ならざるも、大にその作用範圍を制限せり。次で雜誌『十九世紀』に書を寄せ、ダーウイン以前の生物學者が進化の事實を無視せし如く、今日の生物學者が、自然淘汰以外の現象を無視することを攻擊せり。

教授ハックスレーすらも、『大英百科全書』中、進化論の項に稍不安の調子もて、『自然淘汰が種の產出に如何なる効力あるかは、未定の事實なり』云々といへり。

四　されど、是れよりも大切なるは、後天的性質の遺傳不遺傳に關し、教授ワイズマンの新派が、舊ダーウイン派及びスペンセル派に對しての論戰なり。スペンセル氏はいふ、『後天的性質遺傳せずば、進化あることなし』と。されど、ワイズマン、ランケストル及びその他は、絕對的に之を否認す。

F註――九十七頁

カント、と實體論的證據法　カントは、神の觀念より、神の現實を推論せんとするは、不當なるを確信す。されど、茲に亦注意すべきは、其の『純理の理想』は、自然神學上に大切なるを認め居ること是れなり。即ち曰く、『單の思辨的の理性は、決して至上者の存在といふが如き大問題を解き得るほどの力あるものにあらず。されど至上者の存在已に認められ居る以上は、理性に確かに此の知識の誤謬を匡正するの効是れあり。例せばその自家撞着の點を除き、他の理論との衝突を避けしむる等是れなり。……此故に無上者は、單の思辨的理性に取りては、單の理想たるに止まり、……而して此の理想が、客觀的事實なるを證明するは、此の論法の能くせざる所なるも、而も又之を否認することも、能くすべからず』云々。

G註――九十九頁

合理的實在論　此の論法は、ブラライデルの左の言能く之を言盡せり。曰く、『此故に、外界より得たるにあらざる理想の思想法と、思想の創造せしにあらざる實際存在法との一致は、爭ふべからざる經驗上の事實なり。我等が知識の根據、全く茲に存す。されど、如何なれば、斯く一致を來すにや。曰く、我等の思想と、世界の存在との一致は之を說明するの途唯一あるのみ。即ち思想と存在とは、その基礎を同

ふする一躰のものならざるべからずと想像すること是れなり。之を換言すれば實際の世界的基礎は、また我等が精神の理想的基礎にて、絶對的靈物、創造的理性は、其の實際的側面に於ては、世界法に現はれ、其の理想的側面に於ては、思想法に顯はるとすること是れなり。夫れ思想と存在、主觀と客觀との關係は、有限的靈物にも是れある以上は、我等の摸型たる無限的靈物にありても、此の二者互ひに相關係あるべし。是れ即ち所謂る實躰論的證據法なるもの丶意義なり。此の證據法は、已にプラトンにも存したるもの丶如く、彼は最高の理想即ち神は、存在と知識との双方の原因と認めたればなり。アウガスチンまた之に倣ひ、我等が眞理を知り得るは、畢竟眞理たり法則たる神の性を有するがためとなせること、一再に止まらず。近代に於ては、此の思想は、思辨哲學の基礎となり、首石となれり』云々。

此說の萠芽は、ライプニッツにも、ヘルデルにも、ゲーテにも、將た他の諸大家にも存するを見る。またグリーンの『倫理緒論』にも、此の思想は伏在し、エールのハリス教授の『有神論の哲學的基礎』も、之を根據とし、その他、時代思潮に影響する所尠少ならざるなり。

第四講の註

A註――百十四頁

創造史　創世記第一章の創造と、近代の學術とを調和するの當否に就ては、曾て『第十九世紀』誌上に、グラッドストン氏とハックスレーとの筆戰ありたり。余は今此の議論を述べんとするにはあらず。只一方は、此の創世談にその固有以上のものを添ふるの過ちを敢てしたりといへば、一方は、之をエジプト若しくはバビロンの創世談と同視するの過ちに陷ゐれりと言はんとす。

ヘッケルが其の『創世史』に說けるところ、頗る公平なるを覺ふ、曰く、『創世記第一章にあるモーセの創世史は、舊約の緒言たるを以て、猶太教、及び基督教世界を通じて今日に至る迄も、一般に承認せらる。其非常なる成功は、猶太教及び基督教の教義と密接の關係を有するを見ても明かなる而已ならず、其記事の始終を通じて、思想の聯絡を失はず、太古の諸國の混亂せる創造談に比して其趣の異なるを見て明かなり。第一に神は、無機躰として地球を造り、次で光と暗とを分ち、次で、陸と水とを

分ち、地球が漸く有機躰の生息に堪ふるに至り、植物を造り、動物を造り、中にも、水と空との動物を最初に造りて、次に地上の動物を造れり。最後に至りて、神は、己れの像に肖せて、世界の統治者たる人類を造り給ひぬ。さて、此のモーセの創造談に、普通の進化説と共通の根本的思想二つあり。第一は分化の思想にして、第二は進化の思想是れなり。モーセは勿論、進化の法則の結果を創造者の直接作用と認めたるは、さることながら、而も、其説の中には、進化と分化との思想は含まれ居たるなり。さすれば、我等此中に、神の默示を發見せずとするも、モーセが自然を見るの力の大なるに對し、又その創造説の單純自然なるに對し、驚嘆を表せざるを得ず』と。

ヘッケルが、モーセの創造史を神の默示ならずとする理由他なし。(第一)は、地球を宇宙の中心とするの誤謬。(第二)は人類を世界創造の豫定的目的とするの誤謬是なり。されど此の『兩誤謬』は、我等必ずしも意に介するを要せず。其他の點に關しては、モーセの創造論は全く古き傳説を傳へしものにて、近代地質學の發見にかゝる學理を述ぶるための記事にはあらず。而も默示の靈は、此の中に働き、以て之を一般の宗教的思想を顯す機械となせしのみならず、又記者をして創造事業の廣大なることを悟らせ、能く之をして人心に合點せしめ得る樣記述せしめたりしなり。

B註――百十九頁

無機躰の進化――星霧説　こはカントとラプラスとの臆説に過ぎざるに、恰かも、學術上の定説の如くに、思ひ做す人多く、現にストラウス、スペンセル、クロッドなどの宇宙進化説の骨子たり。されど、こは確定の説にあらざるのみか、年と共に、之に反對するもの多く、有名の科學者にして、全く之を排斥するものも、亦是れ多し。

アール、エー、ブロクトル氏、一千八百八十八年五月二十九日發行の『マンチエストル試驗者及ひ時事』に『宇宙の隕石的誕生』と題して論じて曰く、

『ラプラスの星霧説は、稍不當の地位を占むること已に久し。ラプラスは「假説」てふ語が、尙ほ其の固有の意義を失はざりし時代に、之を一個の假説として提出せしものなりしに、最初よりして多くの人に歡迎せられ、一個の定説の如くに、受取らるるに至りぬ。されど、精確なる物理學上の知識を有し、兼ねて又、天文と數學とに通せし科學者は、一人も之を學説と認めしこと是れあらず』。

ブロクトル氏は、此説の梗概を叙したる後、追記して曰く、『ラプラスの星霧説は、二個の重大なる反對を受くべきものなり。第一には、余が前にも説きたる如く、絶大且つ稀薄の蒸氣圏が一團となりてラプラスの説ける樣に回轉するを得ざるべき事。

第二に、此說は、太陽系の特色の或ものを說明するも、或ものを說明し得ざる事』。

プログトル氏は、それより此の兩點を詳かにせられたるが、氏の自說は即ち『隕石集合說』なりとす。

ケンブリッジの天文學敎授サーロベルト、エス、ボールも亦曰く、『此說は到底思辨以上のものにあらず。觀察を以てしても、之を確立するを得ず。計算を以てしても、之を證明するを得ず』云々。

C註――百十九頁

循環說　舊世界は破滅して是れより亦新世界生出し、循環究まりなしとの說は、世界に起源あるを認めざる思辨家の夙に懷抱したりし說なり。即ち波羅門敎の如き、古代の或る希臘哲學の如き、ストア學派の如き、皆之を主張し、近代に於ても、創造說の反對說として、唱道せらるゝことなきにあらず。

カントは、一千七百五十五年、その『天躰說』に於て、之を唱出し、(されどカントは、世界に初ありしを信じたり)ストラウス之を踏襲せり。フアトケ及びその他、亦之を懷抱せり。

スペンセル氏また物の起源は、知るべからずとなすと共に、即ち此說を採る。

さて此の無始的循環說は、面白きふしの、なきにしもあらず。されど到底維持するを得ざる說なり。

一　哲學上よりいへば、世界形質論的證據法を論せし際に述べたる原因結果無終相續說に存するほどの困難、悉く皆之に存す。此說は甞に不可想的のものなるのみならず。理性は我等をして、之を自家撞着として拒絕せざるを得ざらしむ。

二　科學的にいへば、此說は、エチルギー消散說、及び宇宙は遂に均衡に歸すべきものなりてふ說に背けり。エチルギー消散說に關しては、サーウイルリヤム、ダムソン曰く、

(1)現今物質界には、機械的エチルギー消散の傾向あり。

(2)多少に拘はらず、機械的エチルギーを回收することは、物質的作用にては、不可能なり。又植物的生命を有する物質や、動物の意思に服從する物質を以てしても、到底その効なかるべし。

(3)現今物質界に行はるゝ法則の下にありては不可能なる運動が、既往若しくは、將來に於て、起ることなしとせんか。地球は、既往に於て、人類の住むに堪へざるものとなりたるべく、將來に於ても、亦然らざるを得ず。

スペンセル氏また、各處に行はるゝ作用の結果として、『我等は無所不在的の死に進行しつゝあるものなり』といひ、『凡て今日までの變化の結局は、即ち死滅なり』と說けり。

スチユワルトとテイトも亦曰く、『熱の傾向は、均衡にあり。熱は、此の宇宙に取り、無上の共產者にて、結局、現今の制度を破滅すること疑なし』。

D註――百二十二頁

『永遠的創造』　オリジエンの說は、其の『デ、プリンシピイス』第一卷二章、第三卷五章等に見ゆ。先づ前者にありては、神若し其の支配すべき受造物を永遠に有せずば、全能にあらざるべしといへり。次に、後者にありては、左の反對論に答へたり。曰く、『世界若し始ありとせば、世界開闢前、神は何事をなしつゝありしや。是れ蓋し、神の性質は、休止不動なりといふも、善者或時善をなさざりきといふも、全能者或時その力を顯さざりきといふも、皆不敬不理のことなればなり』と。オリジエン之に答へて曰く、『神は、此世界を造り給へる時初めて其の働きを開始し給へるにあらず。されど此の世界の破壞後には、又他の新世界の生出する如く、現今の世界生出前、他の世界ありたるべし。……此等の證據に由て考ふれば、現今の時代以前に時代あり。現今の時代以後に時代ありしを知るべし』云々。オリジエンの此說は、世界無究永續說なり。

ローテは先づ思想の必要上、自己に我あることを設定し、而して是れより非我を設定し、神も亦然らざるべからずとなす。所謂る非我とは、純粹物質にて、(所謂る純粹物質とは空間と時間とに外ならざるものの如し)是れ即ち無始的行爲の產物なり。而して、こは、根本的創造事業にて、是には始なし。之に反して、世界なるものは、有限的進化の結果にて、空間と時間內に存在し、隨つて始ありといふ。

ドルチルは、此の現世界を以て、二個の永遠世界の中間にありとなし、以て、此の問題を解釋せんとす。即ちいふ、『相續律や、進化律は、永遠までも繼續すべきものとは謂ふを得ず。之と等しく現今の有形有限の世界以前に精神的世界なかりしとは謂ふを得ず。……此の精神的世界には、時間なし。而して之を時間的に解釋し得るは、之を其の相續者たる世界と相對照すればなり。此點よりして考ふれば、過去に一の世界ありしといふを得べく、斯くして、此の世界を蠶食し去るべき終りの永遠世界と、無始無終の光明中に立てる始めの世界との間に、現在の世界は恰かも大海の孤島の如くに、介在すと謂ふべし』。

此のローテ及びドルチルの説には、共に困難の伴ふを免かれず。ミユーレルがローテを評せる中にいふ『世界開闢といふことに含める困難は、此の場合には、却て不可解といふことになるにあらざるか。その理由は、開闢といふことを否定しながら、永遠的創造てふ事實を認むるを要し、又神は久しく放棄したりしものを再び進化せしめ始め給へりと認むるを要すればなり。世界開闢てふこと若し、不創造より創造への過渡を意味し、神の不變性に矛盾すといはゞ、今も亦神が不活動より活動に移れりといふものにて不都合なるにあらざるか。是れ此の場合にありては、神己れを外形的活動に自啓する事その性質の必然となれるものなればなり』。

E註――百二十四頁

永遠と時間　此の難問は、古今、多くの思想家を苦めしものなり。

アウガスチン『神の國』の中に記して曰く、『永遠と時間とを熟考するに、時間なるものは、運動する者なくば存することを能はず。永遠なるものは、變化すべきものにあらず。果して然らば、運動するものの無かりし前には、時間もなかりしといふは見易きことならずや。……此故に不變の永遠性を有し給ふ神が、世界と時間とを作れりと認め、而して此神は時間内にて世界を造れりといはんとすれば、即ち世界開

闢前、時間の標準たるべき或物を造り給へるとありと謂はざるべからず。……げに世界は、時間と共に造られしにて、時間内にて造られしにはあらず。是れ時間内に造らるゝものは、時間前と時間後にも造らるゝものにて、其前に既往あり、その後に將來あるべければなり。されど世界以前には時間はあらざりき。是れ時間を過ごすべき受造物なるもの、一も是れあらざりし故なり』。

ドルチルの説は、本文中に述べ置きしものと相一致す。曰く、『世界が實存するに至りし時、時間も亦存在するに至れるなり。此の世界の前には、將然的の時間はありたるべきも、こは、實際の時間にはあらず。論理的意義に於ける時間のみ。然らざれば、時間の前に時間ありきといふに當ればなり。而して此の將然的時間なるものは、之を實際的時間てふ見地より見れば、只念頭に過去のものとして之を描出し得るのみ』云々。

F註――百二十七頁

萬物の靈たる人類　人は萬物の靈なりてふ思想は、各派の學者種々に之を記述せり。

カントは曰く、『人類は凡ての有機物の如くに自然界の目的たるに止まらず、また自

然界最終の目的にて、其他一切のものは、目的の系統を構成するに過ぎず』云々。

ヘルデルは人類を以て、高低兩世界の仲介者となしたるが、是れ全く人類を萬物の靈長と認むればなり。曰く、『人類は地的有機躰の最高者、最終者にして、又天的受造者中の最低者なり。此故に人類は高低兩世界の仲介者として、互ひに相密接するを得せしむ』云々。

ハックスレー曰く、『人類と他の活物との關係、活物の發する諸勢力と、其他の諸勢力との關係の親密なるを見ては、自然界が無定形より有定形に進み、無機躰より有機躰に進み、盲目的勢力より意識的知情意となる階段を示すと解せざるを得ず』云々。

チンダルは『ベルファスト演說』中に、高等動物の知力の進化と觸感の進化とが、兩々相幷行することを說き、『之が冠冕をなすものは人類なり』といへり。

ウオレースは、人類を以て、『廣大なる有機界の靈長となすと共に、亦或る程度までは一種殊別の存在者なり』とせり。

カフタン曰く、『自然界の目的、歷史と進化の目的、只人類に存す。換言すれば人類は萬物の靈なりてふ事實に存す。我等は全世界を尋ねても、人類及びその精神的生命に比すべきものを發見すること能はず。況んや之に優れるものをや』云々。

G註――百三十九頁

心と機械的因果律　ハックスレーの語に、『人類の思想界より漸次、精神と呼び、自發作用と呼ぶものを排除す』といふことあり。こは果して如何なる意義ぞ。我等充分之を明らめ置くを要す。ケチヂー氏之に就て、此說若し眞ならば、我等が神の働きと人心の働きとに關する信仰に大影響ありとなし、而して曰く、『若し此說の如くならば、人心の働くべき餘地は一もあることなし。今日の鐵道や、滊船や、紡績機などを豐富なる人心の働きに歸するは、かのスウイフトの諷刺談中の狂人が、遊星の運動の監督を、己れの熱心なる注目に歸すると同一の誤謬なりといふ。即ち人類に心は無かりしとも、鐵道、滊船、紡績機は、やはり構造せられたるべく、猶ほかの天文家が注目を廢したりとも、星辰は、其の處を得るが如くならんとなす。コントはいふ、天躰の顯せる光榮とは、畢竟ヒッパルカス、ケプレル、ニウトンその他諸天文學者の光榮のみと。されどハックスレー等の自動說をして眞ならしめんか、その結果は之と正反對にて、毀損せらるゝものは、ヒッパルカス、ニウトン、ケプレル等の光榮ならん。其の理由は、春分、秋分の進行を人に知らしめしは、ヒッパルカスの知慧にあらず。『プリンシピア』を書くの原因となりしものは、ニウトンの思想にあらず、ケ

プレル法を發表せしめしはケプレルの思想にあらず。是等の學者は、單の意識的自動機械にて、たとひ無意識的自動機械たりしとも、その結果は、やはり同樣なるべきを以てなり』と。是れ決してハックスレーの說を曲解せしものにあらず。却て眞面目に、その說を敷衍せるものたるなり。而して若し此說の如くならば、道德といひ、責任といふものゝ地位は、全く之を見得べからざるなり。

H註――百四十三頁。

心と大腦作用。此の問題に關しては、敎授カルダーウードその著『心と腦髓との關係』中に評論せられたり。同書の價値は、主として、左の諸點を證明せる點にあり。

一　腦髓の本務は、思想の機關たるに存せず。感受起動（センソリー、モートル）的活動の機關たるに存す。

二　腦髓の大部分は感受起動の作用に專用せられ、他の目的に使用せらるゝ部分は極めて尠し。

三　動物を比較するに、知力の多少と、腦髓構造の單複との間に、一定の比例なし。知力の進步せるもの、必ずしも、複雜の腦髓を有するには限らず。犬の腦髓は馬よりも單純なれど、知力は却て是よりも進步せるの類なり。

四　腦髓は、種々特別の細胞を有し、種々の心的作用の專用に供せらるとの說あり

て、ヘッケルは心細胞なるものありといひ、ベインは、記憶細胞なるものありといひしも、是等は、生理學の承認せざる所なり。

五　心と腦髓との關係といふは他なし。心は腦髓の感受作用に依賴し、且つ又腦髓の起動作用をも、利用すといふ點にあり。

六　心は腦髓の活動と種々の關係あるに相違なきも、心的事實は、全然腦的事實とは殊別にして、心的現象（感覺を始めとして、感覺の意識、記憶の意識、言語の意識、其他高等の諸意識）また腦的活動に超然し、腦髓の活動を以てしては之を解釋すべからず。

此の結論左の如し。人類の知力なるものは、その性質全く感受器と異にして、其の作用は、感受器の法則を以てしては、說明すべからず。……意識の事實を以て見れば、心は一種特異のものにて、神經系統とは、其の性質を異にし、感受器の機械作用とは其の作用の法式を異にす。隨つて又、我等有機躰の理性を解釋し、外物に存する意匠を發見し得るものなり。

敎授カルダーウードは如上の諸點を是定すると共に、左の諸點を否定せらる。

一　心と腦髓の活動とを同一視するの說。

二　心的事實と物的事實との間には、精確の照應ありとの說。即ちベインやスペンセルの如くに、此の兩事實は、同一物の兩側面なりとの說。

三　心的諸現象は、腦髓の變化として解釋し得るとの說。即ち腦髓の運動、類別、放電として解釋し得との說。

四　心は腦髓に影響を及ぼして、之を變動せしめ得るものならず。人生の事、皆神經系の作用及び反動なりとして、說明し得べしとの說。

第五講の註

A註――百五十三頁

創造の欠點即ち有神論に對する反論　ルクレシアス夙に此の論法を用ゐたり。即ちいふ、たとひ、我は第一原因の何なるかを知らずとも、宇宙の欠點を見て、之を神の業ならずと斷言せんと。

セチカは、粗ぼミルと同じ意見を懷抱せり（ミルの說は本文に見ゆ）。曰く『神の力の範圍如何。神は自ら材料を造りしか、或は又他より供給せられしものを用ゐしか。己れの欲することは悉くなし得たるか、或は又材料に欠點多く、隨つて技術の拙き爲めにあらで、材料の不隨意なるため、完全のものを造り得ざりしか』云々。

厭世論者は勿論此の自然界の害惡欠點に重きを置き、之を以て、有知的原因より出でたるにあらざる證據となす。例せば、ハルトマンは曰く『神若し創造前に、意識を有したりとせば、創造は贖ひ得べからざるの犯罪なり。之を盲目的意思の結果と看做して、初めて之を恕し得べし』と。

コント及びヘルムホルツ等は、自然界の欠點を擧げて意匠論を否認し、エス、レイングは、世界に惡の存在するは、全能慈愛の創造者の存在と兩立せざるが故に、二元論を取らざるべからずといへり。

凡そ是等の諸說には、誇張、偏僻の點もあれど、又此の世界には、巨大の恐るべき禍害の存するを示す。有神論は之に對して奮戰し、その世界觀のために、大に辨ずる所あるを要す。

B註——百六十三頁

二元的罪惡起源說　宇宙に二元ありとの說は、昔は波斯敎之を主張し、近時にありては、エス、レイング氏之を『兩極律』と名けて、唱道せらる。

世界の善惡を兩分して、凡ての善を善の本躰に歸し、凡ての惡を惡の本躰に歸するは頗る俚耳に入り易き事なるも、聊か熟考せば、其忽ち不道理なるを發見せん。

物質的の善惡は劃然之を區分することなし。即ち其の善惡は、往々只程度の問題に止まり、又快樂必ずしも快樂ならず、苦痛必ずしも苦痛ならざること多し。例せば、同一の火は、余の手に愉快を覺えしむれども、亦之を燒くべく、同一の太陽は田野を豐饒ならしむれども、又百草を枯死せしむべし。然らば、太陽は、善の本躰に屬すると共に惡の本躰に屬すといふべきか。火にありても亦然り。

次に、道德的善惡に就ていはんに、惡の本躰なるものは、獨立的に抽象し得るものにあらず。品性と意思とを離れては、道德的の惡なるものは、無意義のみ。又品性と意思とは、多少善の知識を具へずんば、又惡なるを得ず。是れ、熱の如き、電氣の如き自然的勢力が善にもあらず、惡にもあらざる理由なり。此の故に、惡の本躰にも、多少善の知識なかるべからず。然らざれば、惡たるを得ず。已に多少、善の知識あらば是れ元來より惡なるにはあらず。自らの撰擇によりて惡となれるなり。要するに、惡は、自己の實躰を有するものにあらず。只善の反對物として存するのみ。故に惡の本躰なるものは、之を善の知識より抽出すれば、善にもあらず、將た惡にもあらざる單の自然的本躰とならん。是れ二元論にありては、常に自然的の惡と道德的の惡とを混淆するに至る理由なり。

C註——百六十三頁

ヘーゲルの罪惡說　ヘーゲルがその『宗敎哲學』中に述べたる罪惡說は、之を略說すれば、左の如し。

一　惡は哲學的必然に由りて存在す。人類は元來、靈なれど、靈は直覺的に起るも

のにあらず。靈は獨立にして自由。自然に反對し、自然に超越し、自然と殊別し、而して此の殊別によりて自然と調和するのみならず、又自然の眞理と調和するに至るべきものなりとす。

二　人の原態は純然自然的なりしといふべく、之を無罪的なりしといふは當らず。無罪的といへば、多少道德的意義を含めばなり。人の原態は、自然と相一致したるもの、即ち粗俗、肉慾、野蠻の狀態なりしなり。

三　此時に於ける人の本性に關しては、二の反對したる定義あり。一は、人類は性善なりとするもの、他は性惡なりとするものなり。人類は性善なりといふは、即ち自躰、靈なるもの、合理的なるものといふに等し。又性惡なりといふは、人類は自然の儘なるに由る。されど人類は何時までも、自然物たるべきにあらず。何時までも、直覺的のものたるべきにあらず。

四　人をして自然的狀態より道德的狀態に移らしむるものは即ち知識なり。意識の覺醒と共に、人類は罪の感を起し、不調和の苦痛を感じ、自家撞着を知るに至る。之を聖書に、人類は知識の木の實を食ひて惡となれりといへり。

ヘーゲルを以て見れば、如上の各發展を斷滅し行くこと、是れ即ち贖罪なりとす。

D註――百六十七頁

リツヽルの罪科說　リツヽルの罪科說は、結局罪科を主觀的幻想となすものたるは、プフライデレル、ベルトラント、スターリン等の皆一致せる所なり。こは、リツヽル說の左の諸點を見るも、明かなり。

一　リツヽルは凡て刑罰的性質のものゝ神に存するを認めず。刑罰とは、法律上より借り來れる思想にて、之を神に適用すべきにあらず。而して彼は明言していふ『外界の諸惡は、罪科の主觀的意識にふ見地よりして、之を神の刑罰と認め得る而已』。

二　リツヽルの和解說　和解とはリツヽルの定義によれば、罪の結果として神人兩者の間に存せる障壁を、撤去するの謂なり。而して神人兩者間の障壁とは、罪科の意識なるが故に、赦罪とは、此の罪科の意識が撤去せらるゝことをいふ。毫も客觀的事件が起ることの謂にあらず。

三　リツヽルの說によれば、罪とは皆、無識に由りて犯せるものなり。隨つて罪は皆恕し得べきものなりといふ。されど此の恕罪といふも、神の抱きたまふ不快心消滅するの謂にあらず。只罪人の抱ける無根の罪科的恐怖、消散することをいふ

のみ。

E註――百七十一頁

原人野蠻説　は無根の想像に基づく。

一　之を進化法より演繹して、人類は、動物の狀態より漸次進歩せるものといふに至りては、全く無根の想像なり。

二　次に現存野蠻人に比較して、

一　現存野蠻人は、原人の狀態を代表すといふも、是れ亦無根の想像なり。マックス、ミューレル曰く、『野蠻人は、その野蠻なれば野蠻なるほど、原人の狀態を代表するものと思はるれども、是れ誤りなり。精細に調査するに、野蠻人の習慣にも、案外に人爲的のもの、複雜のものありて、又その歴史上の進歩と退歩とは、大に文明人のそれに類す』と。

テイロル曰く、『船長クックの時代には、ポリチシア人は野蠻人と思はれしも、其の信仰と其習慣とは、明かに、高等なる亞細亞人種の子孫たるを顯す』と。墨其哥及び白露、ミスシッピー河畔の築塚人種等の文明の退歩に關しては、レヴイルの『ヒッパルト講演』、ダッソンの『化石人及びその近代的代表』、アーガイルの『自然界の一致』

等を見よ。

二　且つ又此説は、野蠻人の現狀に存する高等分子をも無視せりと謂はざるべからず。マックス、ミューレルの『宗教の起源及び發達』百〇六頁―百十三頁を見よ。

三　有史前の人類に關しては、本文中にその要點を擧げ置きたり。

一　有史前の穴居人種は、原人を代表すとの説も、無根の想像なり。彼等若し原人を代表せば、原人初發の中心地に、最も、近き處に居住すべき筈ならずや。

二　石器及びその他の物を見て、之を用ゐたる人種の知力及び道德力を證明せんとする説にも誤れるもの多し。ミッチエルの『既往及び現在』及び『文明とは何ぞや』を見よ。

三　太古の大文明なるものは、野蠻より發達したりとの形迹なし。ラウリンソン曰く、『埃及には太古に野蠻時代ありし形迹なし。是れ空言に似たれども、調査の屆きし限りにありては、埃及には、野蠻の時代なかりしとは、凡ての學者の一致せる所なり』と。同人またバビロンに關していふ、『バビロンには、粗野の時代ありしに似たれども、此の時代にありてすら、一種高等の美術ありし證據充分なり』と。

F註――百七十二頁

太古の一神的觀念　第三講A註に於ては、人類最古の宗教思想が、その最低のものならざるを說き置きしが、今は、最古の宗教思想が、或點よりいへば、却てその最高のものたりしを說かん。即ち一神てふ意識は、人類歷史開始の時より存し、以來曾て全滅せしことあらず。

エブラルドは、古代諸宗教を調査したる末、說いて曰く、『我等未だ曾て、拜物教より多神教に進み、多神教より一神教に進みし形迹を何處にも發見せず。却て、異教の諸國にも、昔は多少純粹の一神教ありて、それより漸次墮落したるを見る』と。

古代の埃及宗教は、その精神に於ては、一神教なりき。ルージュ曰く、『埃及には各地方それ〳〵の神なりしも、畢竟は、その名が異なるのみ。その教の主意は相同じく、神は何處如何なる時にも、一躰、自存、近づくべからざるものたること、變更なかりしなり』と。

古代のバビロン宗教は、多神教なりしも、各神の氏子、皆己れの神を、無上の神とせしを見れば、一神的意識ありしを見るべし。

印度の毘陀教も亦、後世の印度教よりは、純粹のものたりしにて、言語學の上より推論すれば、毘陀の多神教なるものが、全く存在せざりし時代あるを知るべし。

波斯教は、二元教なれど、その善神アフラ、マズダに就ての觀念は、古代には極めて高潔にて、殆んど、一神教と稱すべきものなり。

ヘロドタスはいふ、希臘古代の住民たるペラスギは、神々を呼ぶに特別の名を用ゐず。只一括して之に祈禱せり。其之に特別の名稱を命じ、特別の職務を付するに至れるは、ホーマル及びヘシオドよりも以前にはあらずと。マックス、ミューレル曰く、『我等希臘歷史の最高所に上り見れば、神を至上者とするの觀念、歷々として現はれ來る』と。

プルタルクまた羅馬古代の宗教が、排偶像的、精神的なりしを說く。

G註＝百七十二頁

人類の古さと地質時代　人類は一時非常に古きものとの說行はれしが、近時はさた大に之を制限するの說、學術界に行はる。

『エデンバラ評論』(一千八百九十二年四月分)の一寄書者『北米の氷期と人類の古さとの關係』と題する一篇を草し、此中に、ナイアガラの瀑布は、一種の測時機なりといひ、合衆國の氷河期は、大略紀元前六千年に終りたるものと斷じ、ミスシッピーの流域に就て算定するも、粗ぼ同一の結果を得らるべしと說き、進んで、米國の氷期が、今

より一萬年以内に終結せりとせば、歐洲の氷期亦然るべし。土地の異なるに隨つて氷河の進行に區別ある筈なしといへり。

ピー、エス、ケンダル氏が、一千八百九十二年、英國協會地質部に於て朗讀せし文中にも、同一の意見見ゆ。曰く、『氷河期は、今より二十五萬年ほど以前なるべしとは近頃まで、地質學者の口にせし所なりしかど、凡ての物質的證據は、却てその極めて新しきものたるを證す』云々。

同じ集會に於けるサーアーチボルド、ガイキーの會長演說にも、物理學近時の傾向は、從來地質學者の主張せし年月を非常に短縮するにあることを說けり。

五註――百八十五頁

罪と死の關係　リッヽルは、死と罪との關係を否認する近代の說に同意を表す。而してパウロが、此の關係を是認せしことは、其の認むる所なるも、使徒の一人が此の意見を抱きたればとて、我等の規則とすべきにはあらずと、謂へり。

一千八百八十二年七月の佛國モントーバン『神學雜誌』にシャール、デュカッスの草したる『生理的の死と罪』と題せる、一文あり。余の立場と相符合せり。其略に曰く。死は人類なき以前より存し、有機界の法則なりといふは、さることながら、人類の出でし時、之と共に、一種新たなる事態は、始まれりと謂ひ得ざるにあらず。人類は、單に高等動物といふべきものなるや。否却て一種特別の界（キングドム）を成すものにあらざるか。即ち人類は、有機界の終點たると共に、精神界、理性界、道德界の分岐點たるにあらざるか。斯く人類は、自然界と神界との聯鎖なれば、物質を精神化し、之を利導して、新屬性を發達せしむるは、其の職任にあらざるか。隨つて人類は此際、物質的にも不死を得たるにて、若し罪を犯さゞりしならば、その肉躰にも永生を得たるならんと斷言するに何の差支かある。是れ聖書にも、將た科學にも符合するものなり。公平なる科學は、人類の有機躰と動物の有機躰と殆んど相同じきを認むれど、之と共に、又人類は元來心的動物にて、その理性の優等なるを證し、人類界は即ち獨立界なりとなす。此故に、神の元來の設計にありては、人類の死の條件は、動物の死の條件と同じからず。之を以て見れば、今日、人類の死するといふも、尙ほ是れ罪の結果なり。而してこは、全然聖書の敎に合することなりとす云々。

第六講の註

A註――二百〇四頁

前在説　稍近時の神學は、新約に於けるキリスト前在説を許せども、尚ほ之を以て猶太教思想なりと説き去らんとす。即ちパルナック、バルデンスペルゲル、ボルチマン等の人々は、前在なる觀念を以て、ラビ派及び默示的文學に行はるゝ思想となし、アダムの如き、エノクの如き、モーセの如き特別の人々は勿論、幕屋の如き、神殿の如き、律法の石牌の如きものも、天に前在すと認められ居るといふ。而して猶太人が斯る觀念を抱きたる理由は、大略左の如し。

一　是れ貴重の物を普通の有形物と區別し、空間と時間とに超然たらしめんとの希望に出づ。（パルナックの説）。

二　是れ『目的』を化して『原因』たらしむるものなり。パルナック曰く、『物の終りとして後に顯はれ來りしもの、往々にして實質視せられ、實は此の物等よりも先きにありしものとせらる。即ち目的は却て手段よりも以前に實在せるもの、手段のための原因とせらるゝなり』云々。

三　是れ一種の預定説にて、理想的前在を實際的前在となすに至れるなり（バルデンスペルゲルの説）。

此の思想は直ちに、キリストにも適用せらるゝに至り、復活して昇天せるメシヤと信ぜらるゝに至れりとは、パルナック等の説なり。即ちパルナックは曰く、『初代の基督教徒等は、イエス自身がメシヤ的意識より發し給ひし言以上に出で、思辨的にイエスの人格の價値と意義とを解せんとするに至れるなり』と。ボルチマンも亦曰く、『前在なる思想は、奇蹟的に、使徒等に傳へられしにはあらず。亦パウロが初めて構成せしものにもあらず。又當時に珍奇なりしものにもあらず。是れ全く猶太教がメシヤに屬するものと認むる性質をイエスに適用せるもののみ』と。

さて此ボルチマン等の説を承認するに先だち、我等の聊か確かめ置くべきとあり。

一　第一に確かむべきは上記のラビ的觀念は果して論者の説の如く、當時遍く行はれ居て、使徒たちのキリスト前在説は全く之に起源せしか。

二　キリスト前在説は、キリストの自意識より出でし其の明言（たとへば約八〇五十八、十七〇五等）に根基せるものにあらざるか。

三　新約のキリスト前在說は、全くラビの思想と相似たるや。ハルナックの說によれば、地上の物皆その物質的性質を具へし儘にて、神と共に前在したりとするは、是れ猶太的思想なりといふ。されど萬物は、永遠より存在せるものにあらず。少くとも律法は然り（ラビの說によれば、世界開闢に先だつこと二千年前より存在すといふ）。されどキリストは（1）永遠より存在す。（2）キリストは神として父と共にあり。（3）父と、その性質及び榮光を等ふせり。（4）その神性は此世に於て取り給へる人性とは別なり。（5）その降生は自謙と愛とに、基ける自由行爲の結果なり。此の基督敎の敎義は、ラビ的觀念を以てしては、能く說明し得べきにあらず。

四　尙ほ此の說明の不充分なるを證する特別の事實一ならず。

（1）論者が新約中の證文なりと稱する加四〇二十六、來十二〇二十二、默二十一〇二等は、頗る薄弱のものなり。

（2）猶太敎のメシャ前在說は、必ずしも遍く行はれ居たるものにあらず。且又此說は、新約書の何れにも、見ゆるといふにあらず。却て之を記載するものは、猶太的のものならで、學者の認めて、希臘的感化の形迹ありとするものにあり。

（3）之を載するものに就て見るも、猶太的思想著しからず。例せば、信者は、皆キリストにありて、永遠に撰ばれしものとすること、バウロの思想なれど、されぱとて、バウロはキリストの前在を說く如くに信者の前存を說かず。此故に余は、此說を、事實に符合するものと思ふ能はず。又使徒等は、想像に任せて、キリスト前在說を唱ふるに至れりと思ふ能はず。併しながら、聖靈の導きにより、之を唱ふるに至れりと思ふなり。

B註――二百十二頁

ファイローと第四福音書　アレキサンドリヤ哲學は、如何なる程度にまで、第四福音書及び新約の諸書に感化を與へたりやといふに、諸說相同じからず。ハルナックやヴァイス等は全く之を否定し、ブッライデレル等は、約翰傳、希伯來書、以弗所書、哥羅西書等にその感化を認む。乞ふ之を明にするため、簡單に先づファイローの哲學を撿し、且つ該哲學の出所を調査せん。

ファイローの哲學は、主として、プラトン派、ストア派、舊約書の三より出づ。

一　神の心には、理想的世界ありて、此の物質界は、之に型どれるものとは、是れプラトンに取れる思想なり。されどプラトンは、此の理想界を神の心の一屬性と見たるのみ。一人格者としたるにはあらざるなり。

二　フアイローが、プラトンに負ふ所あるは勿論ながら、ロゴスなる語は、プラトンより借用せるにあらず。こは、ストア派より取れるなり。されど、ストア派に所謂るロゴスは、宇宙に滿てる永遠的神理の謂にて、第二の神の謂にはあらず。然るに此のストア派には、亦神理分岐して、ロゴイと稱する幾多の勢力となるとの說あり。フアイロー即ち之を襲用し、之を舊約の天使希臘の惡鬼と同一視せり。

三　然るに、フアイローは一歩を進め、此のロゴスを以て、絕對至高者たる神と殊別のものとなし、之を實躰視し、之を人格者と認めたるが、此の思想は、プラトンや、ストア派などより得たるものにあらず。即ち舊約より得たるなり。舊約には、隱れたる不交通的の神と、顯れたる神とを區別したるが、此の顯れたる神は、舊約中、或は神の名、或は榮光、或は面、或は言、或はエホバの使と稱せらる。

さて以上の諸點を許す時は、明白となり來ること多し。たとへば、ロゴスを創造者、祭司の長、大天使、仲保者等となせるは、皆是れ舊約より取り來れる思想なり。而して此のフアイローの敎義にして、福音の準備となれるものなきにあらず。されば

とて、フアイローのロゴスとヨハネのロゴスとは同一なりといふものとなす勿れ。フアイローのロゴスは、內部的理性の謂にて、言にはあらず。之に反してヨハネの

ロゴスは言なり。故にパルナックが『ヨハネとフアイローとは只同一名稱を用ゐしのみ』といひしは當れり。而して萬一にも、兩者の間に是れ以上の類似ありとするも、こは約翰傳の價値を輕重するに足らず。フアイローがロゴスを實質視せるは、是れ希臘哲學より得たる思想ならで、却て舊約舊より得來れるものなればなり。

第七講の註

A註――二百五十二頁

近時の三位一躰說　基督教の見地より見て、欠點ありと覺しき近時の三位一躰說種々あり。粗ぼ之を分ちて、三類となすを得べし。

一　**思辨說**　こは基督教の事實に基かざる、先天的演繹の結果なり。此派の最も著しき論者は、ヘーゲル是なり。ヘーゲルは、神の內住的三位一躰を說くものにて『人格』てふ名稱を用ふることをさへ辭せず。而も此の三位一躰は、抽象的三位一躰にて、父とは、純然たる抽象的觀念なり。子とは該觀念中にありて自ら特異ならんとする分子なり。而して聖靈とは、此分岐を平定せんとすることの謂なり。此故に此の三位一躰の差別は、觀念的のものにて、其の有限界に顯はれ來らざる間は、全然現實的のものにあらず。即ち世界のあらざりし前には、三位一躰は實存せず。單に將然的のものにて、また將來の三位一躰の基礎たるに止まれるなり。さて、此のヘーゲルの說には道理あるふしなきにあらず。世界は、神の自意識の媒介なりてふ說の如き、此のヘーゲルの思辨と相符合するものなり。

二　**非人格說**　此說も亦神の內住的差別を認むるものなれど、此の差別は、只將然力の差別、生活力の差別、生存法の差別に止まるが故に、眞の人格的三位一躰にはあらず。此說を執るものは、シエリング、ローテ、バイシュラッグ等にして、近時にありては、エフ、ア、ベ、ニーチユ是れなり。ニーチユは、人格の三位一躰說は三神說なりと喝破し、聖書に聖靈の人格を說き、又多少ロゴスの人格を說ける所あるに相違なきも、是等は、敎條としては、用ふるを得ずとなす。されば、ニーチユの說にては、人格者は只父としての神にのみ限る。他のロゴスと聖靈とは、人格者にはあらず。加ふるに此說は、子たる神を認めず。第二位の神は單にロゴスと稱せられ、イエス、キリスト出でゝ、子は出でたりとせらる。此故に、此說を以て見れば、永遠の子なき永遠の父あるに當る。抑も普通の三位一躰說にも、種々の困難はあれど、ニーチユの此の三位一躰說は、是よりも甚しき矛盾を有すといふべし。

博士ドルチルは、有力なるキリスト神性論者なり。されど晚年までも、キリスト神性論唯一の基礎を維持せられしや否やは疑はし。即ち博士は、其の『基督學史』に於ては、人格差別說を以て三位一躰を說くも、その『敎條學』に於ては、非人格的三位

一躰を說き、三者相合して、一人格を成すとすればなり。即ちドルチルの說にては父も完全の一人格者にはあらず。子も歷史的のキリストにはあらず。一個の自意識内に於ける第一點を父といひ、第二點を子といひ、第三點を聖靈といふのみ。乞ひ問ふ、如何なれば、斯る非人格的の力を父といひ、又非人格的の原理を子といふやと。

さてドルチルは右の意見を貫かんとするよりして、人格的の神が、化身してキリストと成れりと謂ふを許さず。ロゴスなる一個の原理が、處女より生れしイエスなる人類と融合せるのみといふ。されど、此說の如くならば、キリストの神性は、非常に曖昧のものと謂はざるべからず。即ち凡ての信者に見るが如き神人の融合と大差なきものとも見らるべく、或は又キリストは眞の人類ならで、一種特別なる神人融合の產物とも見るを得べければなり。されど、敎會の敎義は、斯る曖昧のものにあらず。キリスト自ら謙りて、人類の事情に服するも、其の起源と本質に於ては、永遠なる神なりとするものなり。

三　新サベリウス說　此の說は、三位を以て、神が己れを顯示し給ふ時の相と見るものなり。シュライエルマッヘルには、此說の傾向あり。ローテやニーチュの說、

亦之に移らんとするものなるが、リッツル派神學者に至りては、只之を取るの外はあらず。

新サベリウス說は、種々の形式を具ふ。即ち、舊サベリウス說にありては、律法に顯はれし父、化身に顯はれし子、敎會に顯はれし聖靈といふに止まりしが、近代に至りては、或は創造者、贖罪者、能聖者とするあり。或は創造に於ける神、キリストに於ける神、信者との內交に於ける神とするあり。或は自然に於ける神、歷史に於ける神、良心に於ける神とするあり。或は神自身、顯示されたる神、內交の活力たる神とするあり。各學者皆それ〳〵の意見を有す。只その中にありて、殆んど、共通の點ともいふべきは、創造者たる神を父と認むること、若しくは、絕對自屛の神を父と認むることと是れなり。されど基督敎の說にては、創造なるものは、神の父性を顯示するものにはあらず。之を完全に顯示するものは、キリストなり（太十一〇二十七）。隨つて神の絕對性に至りては決して其の父性を顯示することなし。加之、此の新サベリウス說は、父子聖靈なる眞の三位一躰を說くものといふべからず。子を認めて、或は『世界』となし、或はキリストとなし、或は『人類』となし、互ひに相同じからざるも、此の第二位者は、第一位者若しくは第三位者の如き神にあらずとするに至

りては、一なればなり。即ちキリストは、形容的、倫理的の意義に於て神たるのみ。神の啓示の所有者として神たるのみ。其の意義にて神なるにはあらざるなり。

B註――二百五十八頁

三位一躰論者たる博士マルチナウ　博士マルチナウの三位一躰論はその『三位一躰的爭論の血路』なる一文中に見ゆ。該文の目的は、ユニテリアン説と、三位一躰説との相違を調和せんとするにあることなるが、兩者若し互ひに一層能く相知るに至らば、即ち之を調和し得べしとは博士の意見なり。博士曰く、『罪に同情せんとすれば、誘惑を知らざるべからず。悲に同情せんとすれば、その深さを知らざるべからず。誤れる信條に同情せんとすれば、その意義とその根據とを解せざるべからず』と。博士は、此の精神にて、三位一躰論の眞理と自信せらるゝものを記述せられたり。

博士の意向や善し。されど、其企てが成功したりや否やは疑はし。只その博士より出でたるを以ての故に、頗る興味ありと謂ふべし。博士は、神に三位の差別あることを認め、又三位一躰論者が此の差別を人格と呼ぶに反對せられざるものゝ如し。其の略に曰く、『果して然らば、其の出現前に自存し給へる神、空と共にあり給へる神

沈靜の中にあり給へる神、……之を普通に稱して第一位者といふ。それより此の沈靜は破れ、思想煥發して言華となり、創造の詩となり、其の觀念は、歴史の演劇となりて現はれ、その肖像は、その靈魂に映射せられたるが、神の此の表顯的方面を指して子といふ。……次に、三位の第三者即ち聖靈に關していはんに、聖靈の人格を他と區別することは、根底あり、道理ある感情に基けるものなり。他なし、人類の精神は、自然界の部分ならずといふこと是れなり。……否我等は、是よりも神聖なるもの、即ち自由意思に於ても、力に於ても、愛に於ても、至上者に似通へるものなり。我等此の特權あるに由り、單の受造物に殊別せる供給を受けざるべからず。即ち我等は靈と靈との活ける交通を要す。而して此の交通を開始し、此の援助と同情を來し、萎靡したる愛天の意識を振作し、我等をして父の神及子の神と一躰ならしむること、是れ即ち基督教會の教へに、聖靈に配する職務なり。要するに、(第一)神が神自身にあることと、(第二)神が宇宙と歴史とに顯れて遂に救てふ一事に達せること、(第三)神が、我等の内的精神と交通することと、此の三種の見地こそは、即ち所謂る三位の「人格」といふものなれ』云々。

されど、此の説は、一種の形式論にて、人格といふ語に代ふるに方面若しくは見地と

いふ語を以てせるもの。是れ基督教の事實を能く代表せるものと謂ひ難し。

第八講の註

A註――二百八十頁

萠芽的稱義說　不完全なる信者も、其の萠芽的聖義の故に、神の認諾を受くといふもの是れ即ち萠芽的稱義說なり。シュライエルマヘル之を『全發達は初一念に含蓄せらるゝが故に』といへり。此說贊成者尠からず。

博士マクラウド、カンベルは、ルーテルに此說ありといふ。成程ルーテルの『加拉太書註解』には、之に類せる言なきにあらず。曰く、『此故に信仰義とせられたり』とは、義は信仰に始れり、信仰、聖靈の初果を結ぶとの義なり。されど信仰弱きが故に、神の歸與なくては、全きを得ず。此故に信仰は義を發せしむれども、之をキリストの日にまで、全からしむるものは、歸與なり。……蓋しキリスト信徒の義を全うするものは、左の二のものとなす。曰く神の賜たる、心中の信仰……、曰く、不完全の信仰をもキリストの爲の故に、完全の義と看做し給ふ事是れなり』云々。されど、該註解全躰の調子を以て考ふるに、罪人の救さるゝは、一に、キリストの十字架と義とに由る

とすること、是れルーテルの說なるは、少しも疑ふべきにあらざるなり。

マルテンゼンも亦曰く、『信仰は小さくして取るに足らざる芥子種の如きものなるも、亦豐富なるものにて、凡ての未來、此中に存す。神その慈愛を以て、此の種子の中に、種々たる未來を認めたまひ、純潔なる意思の中に、完結したる自由の理想を認め給ふ』と。されどマルテンゼン亦說いて曰く、『福音的基督敎會は、信仰を以て受けたるキリストのみ人の義たることを敎ふ。斯くして敎會は、人をして不全多樣のものより、一躰完全のものに歸らしめ、砂漠の漂浪より、自由の湧き出づる淸泉に歸らしむ』云々。

マルテンゼン又曰く、『稱義的信仰は、靈魂の中にありて休止停滯の狀にあるべきものにあらず。却て、活きて、實を結ぶ力ある種子と同樣、その中に大なる萠芽力ありて生命の發達是れより起らざるべからず』と。又曰く、神は此の萠芽的聖義中に、將來發展すべき一切のものを認め、預め、將來の結果を信者に歸與し給ふと。されどそは稱義と混ずべきものにあらず。歸與は稱義のためならで、已に稱義せられたる人の結ぶべき果に對しての態度なり。之を思へ。

唯心論者にして、宗敎論をなす人の中に、萠芽的稱義說を唱ふる人あり。カント然り。ブラッドレー然り。グリーンも亦然り。

第九講の註

A註——三百頁

ルナンの終末學　ルナンの終末學は、其の『哲學問答及び零片』の中に見ゆ。其章顯して『夢』といふと雖も、之を戯談視せられんは、ルナンの本意にあらず。其說に由るに、宇宙なるものの大事業は、神を組織することにあり。神は今日、たゞ理想に於て存在するものなるも、早晩、人類と同種類なる意識に於て、實現せらるゝの時あるべく、此の意識的中心即ち是れ宇宙發達の缺點にして、人格的一神說は、之に由りて眞理とならん云々。而して最も笑ふべきは、斯くの如くにして出で來れる人格的の神が、死者を甦らせ、總審判をなすべしといふことなり。即ち曰く、『進化に進化を重ねて、宇宙遂に一箇の絕對者に達すとせば、此の絕對者は即ち完全の生命たるべく、而して己れの中に、既滅者の生命を復興せしめん。換言すれば、其胸の中に、既滅の凡ての者を甦らしめん』云々。斯る『夢』に對して批評を下すは、事、無要に屬す。されど、一旦信仰を棄てし學者が、斯る說を案出せるを見ては、我等また學ぶ所なしとせざるなり。

B註——三百〇二頁

福音と廣大なる萬物　教授フリーマンは『基督教と地球中心制』なる一論文を一千八百八十九年四月分の『時事評論』に寄稿せられたるが、奇警の點に富む。教授は反對論者の說を擧げて曰く、『基督教の教ふる非常の秘義と絕大の犧牲とを以て成れる設計が、地球の如き微々たるものの爲にのみせられたりとは、不道理なり』と。教授之に對していふ『此說は、之を言換へなば、「此の地球は小さきを以て、我等は基督教の教ふるが如き廣大の事が、此の地球になされたりとは信ずる能はず。此の地球にして若し更に大きからんには、我等或は之を信ずるを得ん」といふに異ならず。……されど斯る理由にて、或は信じ、或は疑ふものありとしも覺えず。此種の反對說は修辭上の反對說にて、眞の反對說にはあらず』と。されど、教授は、一歩を讓り、此の修辭上の反對說にも力ありと認め、更に論じたる所は、第一には、地球中心說の一變が、人の思想と感情との調子に變動を與へずといふにあり。『地球が太陽を回轉するか、太陽地球を回轉するかは、我等が一般的感情、一般的觀察法に些少の影響もなし。……我等之を熟思する際には、太陽中心主義なるも、……實行に於ては、我等

の多數は、地球中心主義なり。我等は太陽は、出沒するものとは謂はざれど、實際には然か思ひ居るなり。……何人も太陽の大小によりて、基督教の眞僞を論せざるべし』云々。第二に教授は、他の世界に於ける住民の有無を論せらる。『他の世界に住民ありや否やは、天文學者も之を斷言せず。……獨り火星は、我等と同樣の人類の住居に堪ふべく、その他の世界には、たとひ住民ありとも、我等とその性質相同じからずとは、是れ天文學者も認むることなるが如し』云々。第三は、教授の議論の特色とも認むべきものにて、此の世界はたとひ小なりとも、而も宇宙の最も大切なるものなりといふこと是れなり。『地球にして若し其の大きさには拘らず、一種の道德的場處なりといふこと、眞ならんか、是れ即ち歐羅巴の如き小大陸が世界歷史の首位を占め、歐羅巴中にありても、希臘の如き一小部が歐羅巴の首位を占むると同樣ならん』云々。

ドルチル亦その『基督學史』の中に、諸家の說を批評し、而していふ『地球は之を諸他幾千のものと比較するに、ユダの中の最小邑ながら、主を出したるベテレヘムの如きものと謂はざるべからず』云々。

其の他エブラルドはその『基督教辨證學』に、反對說を評し、フイスクも其の『人の

運命』中、之に言及せる所あり。

○註――三百十五頁

所謂るパウロの萬民救濟說　パウロの萬民救濟說の最有力の證句は、哥林多前書十五章廿一――廿八、以弗所一章十節なるが、此の兩句とも、萬民救濟を敎へたるものならずとは、有力なる註解家の等しく唱道する所なり。先づ、哥前十五〇廿一――廿八に就て言はんに、廿二節に、『アダムに屬る衆の人の死る如くキリストに屬る衆の人は生べし』とあり。而してキリストに屬る衆の人はキリストに屬て生くべしとの義なりとは解すべからず。またパウロの意、衆の人キリストに屬て生くべしといふにあらざるは、第廿三節を見て明なり。第廿二節はキリスト再臨の際、キリストに屬るものが、復活するの謂にして、如何なる萬民救濟論者も、此の再臨の際の『キリストに屬する者』てふ句を、萬民のことなりとは謂はざるべし。廿六節の『最後に滅さるゝ敵は死なり』てふ句も、復活に由りて、死が滅さるといふの意に止まる。是れ本章の始終を通じて現はれたる意義なり。また滅さるといふは、廿四、廿五、廿七、廿八の諸節と同樣、調和若しくは悔改の義にあらず。威服せらるゝの意なり。而して廿八節の『神凡ての物の上に主たらん爲な

り』といふ、何も、此の意義にて、解釋するを要す。凡ての物とは、從來キリストに直隷せしものをいふ。キリストの王國以外のものは、威服せられて、又神に敵する力なきに至らんといふ而已。

以弗所一章十は、頗る萬民救濟説の論據たるに近きが如し。されど、その『萬物』てふ語を限るに、『或は天に在るひは地にあり』てふ語を以てせしことを思はざるべからず。惡魔の力とは勿論『天に在もの』といふ中には存せず。然らば、『地に在もの』といふ中には、惡魔の力もありて、惡魔も悔改め、神に服從するの義かといふに、こはパウロが、全躰の思想を考へて、決斷すべき問題なり。而してマイヤルも、ヴァイスも、不信者や惡魔の最終悔改は、パウロの意中になかりし點なりといへり。

博士コックスは、末日審判の際に罰せられしもの等、適當の試煉を經て、悔改め、遂に神の愛に復歸すべしといへり。されど、此説若し眞ならば、何故、キリストやパウロは、明かに之を聖書に敎へざりしや。隨つて萬民救濟は一場の夢談といふべく、聖書にその根據なきものなりとす。

聖書の敎は、キリストに敵するもの、遂にキリストに威服せられ、斯くして宇宙の統一は、成就せんといふに止まる。而して此等の敎には、他の意義を含むかも、知るべ

からざれど、そは何人も斷言し得ざる所なり。

明治卅九年七月十四日印刷
明治卅九年七月十六日發行

基督教世界觀與付
定價一圓三十錢

著者　オ　ー　ル
譯者　田中達
發行者　東京市京橋區尾張町二丁目十五番地　福永文之助
印刷者　横濱市太田町五丁目八十七番地　村岡平吉
印刷所　横濱市山下町八十一番地　福音印刷合資會社

著作權所有

發行所　東京市京橋區尾張町二丁目十五番地
（電話新橋一五八七）　警醒社書店

植村正久君編輯主任　田中達君譯

耶蘇基督傳

※神學叢書第一※

◎菊判四百頁餘◎

……定價金壹圓參拾錢……郵稅金拾五錢……

ニウトン神學校教授ラッシュ、リース氏著基督傳の譯本は出版せられぬ、近代科學的研究の思想を應用して敬虔の思想、穩健の調子を失はず、基督學上聖書解釋學上の難問を解決して快刀恰も亂麻を斷つが如し我邦基督傳の著譯已に尠きに非ず而も今亦此一書を加ふるは頗る異色を具へて能く現今基督教思想界の要求に應ずればなり基督傳に關する凡ての問題は歴史的宗教的科學的文學的のもの盡く此中に說き盡されて餘蘊なし敢て江湖の愛讀を祈る。

訂正再版

神學の大原理

ゼ、デ、デヴィス博士著

定價一圓三十錢
小包料十五錢

神學社會現今の風潮、唯新を好み、奇に奔り、却て基督教の本領を失ひ、其生命の源を忘れんとするの顯象は、著者を驅つて、此大著述をなすに至らしむ、論ずる所、○神の支配○罪○救拯○來世○教會學＝實地神學等の諸章にして、引照の該博なる、所論の精確なる、又多言を要せず、苟くも神學の原理を知らんと欲する者には欠く可らざる良書なり。

新島襄先生傳

J. D. デビス博士著

定價一圓
小包料十五錢

先生は、維新前後に於ける物質的文明外形的革命と相俟つて、重要なる文化の基礎を形作るべき道德的革命に於て、拔群の働を爲すべく準備されたるの人、此書はかく準備されたる先生の生涯、性格、事業を詳悉叙述したるもの、明治の明星、一代の偉人、眞個基督教的紳士の面目紙上に躍如たり、附するに先生幷に其家族、居室等の寫眞版拾有八を添ふ。

西鎭、中山忠恕、海老名彈正、內村鑑三、植村正久序

逆境の恩寵

故德永矩規遺稿

定價四十錢
郵稅八錢

事業には失敗し十六年間病床にあり貧苦と失意の中より無限の慰安と富と成功とを收め得たる基督信徒故德永規矩氏が臨終三週前に脫稿したる懺悔錄なり不朽の生命と眞心の成功を渴望する者は來つて此書を繙け必ず得る所あらん。

大西博士全集

◎第一卷 **論理學**
定價金一圓六十錢 小包料金十五錢

東西兩洋の論理を究明し新研究の道を開く斯學の先進者には一大論文たるべく初學者には無上の良教科書たるべし

◎第二卷 **倫理學**
定價金一圓六十錢 小包料金十五錢

古今の倫理學說を學相上內部の關係に從ひて順次評論し遂に自家の立脚地に達せんとす、叙述批評、周到精嚴優に斯學研究者の教樞たるに足れり

◎第三卷 **西洋哲學史**（上卷）
定價金一圓六十錢 小包料金十五錢

本書載する所希臘哲學の原始より中世哲學の末に至る、其間歐洲に於ける思想變遷の跡說き盡くして餘蘊なく、說述明快、評論的確泰西に於ても僅ひ多からざる名著なり

◎第四卷 **西洋哲學史**（下卷）
定價金二圓 小包料金十五錢

西洋哲學諸家の所說を詳叙し其長短を批評し其變遷を論明す、說述明快、評論的確泰西に於ても僅ひ多からざる好著なりとは世人の定評なり

◎第五卷 **良心起原論及論集**
定價金一圓七十五錢 小包料金十五錢

良心の起原如何此至難至要の問題に關する從來の諸說を批評辯難し反て自家の新見を揭げ此今古未了の問題を解決せんと試みられたるもの、數多の遺稿中未だ世に公にされざりしものなり

◎第六卷 **思潮評論**
定價金一圓七十五錢 小包料金十五錢

明治廿一年より同三十年に至る迄、折々起れる思想界の新問題につき、或は世界の大勢、時代の精神に關してものせられたる評論集にして批評家としての博士を最もよく顯はせる者也

◎第七卷 **論文及歌集**
定價金二圓 小包料金十五錢

文學、美術、哲學、宗教、教育、社會其他種々の問題に關する論說あり批評あり和歌俳句新体詩等あり諸般の方面に涉りて先生をあらはし興味最も豐なり

松村介石君著

◎六版 **萬國興亡史**
定價金一圓五十錢 郵稅無料

本書には古代より中古史に至る人類歷史と共に、文明進步の跡と各國興亡の理とを說き、其間政治、宗教、學術、商業界の起原と其發展とを明にす。

◎三版 **歐洲近世史**
定價金二圓五十錢 郵稅無料

本書はコロンブスをして物質界を代表せしめ、ルーテルをして精神界を代表せしめ、懲くて其の今日の文明世界を現出せしめたる人類歷史中に於ける最大光輝ある時代を紹介したるものとす。

◎再版 **萬國最近史**（上卷）
定價金一圓三十錢 小包料金十五錢

◎新刊 **萬國最近史**（中卷）
定價金一圓五十錢 小包料金十五錢

本書は最近百五十年間に於ける萬國の歷史を紹介し、種々の國家と樣々の人種とが、衝突奮戰、優勝劣敗したる跡を叙し、文武兩界に於ける偉人豪傑の活躍を描き、最後に人類歷史の趨勢と、十九世史文明の大發展とを說きたるものとす。

◎新刊 **萬國最近史**（下卷）
定價金一圓七十錢 小包料金十五錢

本書は目下宇內に於ける五十餘國の狀勢を詳說し、其亡ぶべきか、興るべきかの豫測に及び、最後に我日本人に向ふて大希望を與ふると同時に、更に大危險のあるべきことを警告したるものとす。

京都同志社神學校教頭 ラルヂデ博士講述　大宮季貞君筆錄

新約聖書 共觀福音講解

▲洋紙極上▼　（上卷）定價一圓八十錢
▲印刷鮮明▼　（下卷）定價一　圓
▲背皮上製▼　小包料各十五錢

本書は普通の註釋と其趣きを異にし、講義的に解釋を加へ、且つ言文一致の文脉を以て、如何なる人にも了解し易からしめたるものにして、特に共觀福音即ち馬太、馬可、路加の三福音書中、同樣の記事に屬するものは、先づ馬太傳講解中に共に對照して解釋を下し、猶ほ馬可、路加兩傳の講解にたゞ其傳單獨の記事のみに解釋を加へて、同樣の記事には夫々馬太傳講解の頁數を示し、直に索引に便ならしむ、されば如此共觀的に下したるものは、實に本書を以て嚆矢とす可く、世に未だこの類を見ざるのみならず、基督傳の研究に於ては如何に多大の便宜を與ふるかは辯を要せざる所なり、加ふるに博士が多年同志社神學校の教授としての經驗と、其豐富なる學識とを以て講述せられたるものなれば、同博士が先きに著作されたる新約聖書註釋と共に、必ず書齋に備ふ可きの書なりといふ可し。

京都同志社神學校教頭 ラルヂデ博士講述　大宮季貞君筆錄

約翰傳講解

▲洋紙極上▼　定價一圓五十錢
▲印刷鮮明▼　小包料十五錢
▲背皮上製▼

約翰傳福音は先づ其著者ヨハヂに就て由來天下に議論の存する所、該博精緻なる博士は諸說中より數種の有力なる賛否兩說を摘載し又其證左をも掲げて親切丁寧を盡せるもの、而して共觀福音と其類を異にせる本傳は、實にイエス、キリストの理想歷史といふ可きものたるは世人の能く識る所なり、されば共觀福音を研究したる後猶ほ進んでイエスの性格を識り、又キリストの人物に接觸せんと欲せば、よろしく本傳の研究に入らざる可からず、今や其必要に迫りて本傳の講解も將に現はるゝに至れり、特に本書の卷末には「基督傳年譜」を附錄としたれば、世間異論の存するイエス、キリストの年齡及び其公生涯の年數等大に學ぶ所あるべしと信ず。

京都同志社神學校教頭 ラルヂデ博士講述　大宮季貞君筆錄

新約聖書 使徒行傳講解

▲洋紙極上▼　定價一圓三十錢
▲印刷鮮明▼　小包料十五錢
▲背皮上製▼

使徒行傳は基督教會の濫觴史にして又世界的傳道の發端史なり抑も弟子等が師父イエスキリストを離るゝや恰も牧者擊れて群羊爲めに散るの狀態に陷入りしも一朝五旬節の日に際し天よりの靈火に浴するや俄然彼等は生氣の回復し一回の說教を以て三千人の信徒を起すに至り于茲教會の濫觴ことはなれるなり夫よりステパノの殉教となり或はパウロの改信となり終にパウロの異邦傳道となりて當時の文明國に殆んど傳道者の足跡を留めざる所なきまでに至らしめたるはこれ本傳の內容なり博士は此趣味深き歷史を平易に且つ鄭重に解釋を下して餘蘊なし現今世界に於ける基督教會の大勢を識らんと欲せばよろしく先づ初代教會の歷史より研究せざる可らず。

京都同志社神學校教頭 ラルヂデ博士講述　大宮季貞君筆錄

新約聖書 羅馬書講解

印刷中

求安錄

内村鑑三君著　定價三十錢　郵税六錢

題して求安錄と云ふ、書や自ら悲、慨、悲嘆煩悶の余の記錄たるを示す、まこと是れ著者が死の陰涙の谷に沈淪彷徨して、安きを得たるの實驗錄なり、著者と境遇苦悶を等ふする者、之を讀まば、豈唯空谷跫音の感のみならんや、其靈奥に於て深く、其彼岸は光明安慰の鄉たるを確信せしものなくんばあらず、字に涙痕の斑々たるあり、句に血痕の點々たるあり、悚々として人に逼まるの處、未だ靈的苦戰の、此危急に陷らざる者と雖も、之を讀まば、亦以て其戰の如何を窺ふを得ん。

靈界の妙趣

宮川經輝君著　定價二十八錢　郵税四錢

大阪講壇の第一輯として出づ、幽むる處○元始論○基督論○十字架の眞意○所謂の眞意○新生命○永遠の生命○靈覺の妙○聖書論○幸福よりも聖德の九篇、靈界不振寂寞の今日、其妙趣を味はれんことを祈る。

活る基督

宮川經輝君著　定價二十五錢　郵税四錢

▲目次▼●第一章基督傳序論●第二章基督降生の大目的●第三章基督の幼時と其教育●第四章基督の妻●第五章基督の教訓●第六章基督教訓の內容●第七章憂隣の妙旨●第八章基督の權威●第九章基督の犧牲的精神●第十章死に對する基督の眞情

黑潮　第一

徳富健次郎君著　定價四十錢　郵税六錢

3-11
1

324
9

020461-000-0

324-9

基督教世界観

ゼームス・オール／著

M39

ABI-0271